

## 死刑をめぐる状況

死刑映画  
を観る

中村一成

2015—2016

所広司)が出所後も人の真後ろを行進するように歩いたシーンを思い起こす。金は、巖と秀子の「手探りの日々」にそっと寄り添う。それはまるで空気が部屋の調度品のような「存在感」である。しばしば挿入される路傍の花や、普段は気付きもしない何気ない光景の美しさ。そして夜空に浮かぶ月……挿し込まれた映像の数々には、袴田に、奪われた「日常」を還したいという、金の思いを感じる。作品にいくつか挿入される「獄中日記」には、こんな記述がある。

月光は何故か

私に希望と安らぎを与えるものである

それはあの月を娑婆でも

多くの人が眺めていると思う時

月光を凝視することによって

その多くの人と共に自由であるからである  
(一九八二年八月三日)

本作の「通奏低音」は、姉が故郷、浜

## 『袴田巖 夢の間の世の中』

この一年前後に発表された「死刑映画」のうち、本稿では三本を取り上げたい。一本目は金聖雄(『花はんめ』)『SAYAMA みえない手錠をはずすまで』の『袴田巖 夢の間の世の中』である。二〇一四年三月二十七日、再審開始決定に伴う死刑と拘置の執行停止決定で拘束を解かれた袴田巖と、彼を支え続けてきた姉、袴田ひ

で子の日常にカメラを向けた静謐な記録である。

カメラは冒頭、部屋の片隅でティッシュペーパーを一枚一枚、丁寧に重ね合せ、上着のポケットに収める袴田を映す。布団や菓子パンの包装袋まで、袴田は端を揃える作業に執着する。拘置所で義務付けられた整理整頓の名残である。積放されてもおお、彼の心と身体は、囚われの身にある。今村昌平の『うなぎ』で、妻(寺田千穂)を殺して服役した男(役

実と、心中に構築した主観的な世界との間を行き来する。

死刑判決は実に驚くべきことをします  
先ず第一にわれわれの顔を家畜化します  
そして目を閉ざします  
普通の人から見れば  
恐らく死刑囚は過去の者です  
社会人がとうてい  
のり越えることができない  
くらい時間というべき生の放棄  
その血も止まる恐るべき空気が  
死刑囚と娑婆の人の間にただよっていま  
す  
(一九八二年五月十九日)

ドアに付いた染みが死を意味したり  
壁の色がなにか異様にみえて  
人間の姿に固まり  
その顔は  
大分前に処刑された者であったりする  
本当に  
悪魔が鍵孔を操っているとしか思えない

松に建てたマンションの部屋を歩きまわる袴田の姿である。独房内と同じことをしているのだが、観ているうちに私は、小鳥がいか所に止まらず小刻みに飛び回り、外敵の標的になるのを避ける姿を重ねていた。三ヶ月の入院を経て入居した当初は、部屋から一歩も出なかったという。四八年前のように、意味も分からず官憲に連れ去られてしまうことへの恐怖なのだろう。部屋の中で一瞬も止まらずに動き回るのも、もしかすると、一所に止まれば、死に追いつかれるとの恐怖ゆえではないかとも思えてくる。

否が応でも目にせざるを得ないのは、袴田の心に残る深く、重い傷である。身に覚えのない罪による半世紀近い拘留生活、何より死刑判決(一九八〇年、四四歳時に確定)で国家権力から生きること否定され、いつ縊り殺されるか分からぬ朝を毎日強いられた結果である。妄想よりも不合理な現実を強いられた彼は、周囲の人びとと分かち持てる客観的な現

人体と化した悪と善とを  
私は見ることができ

(一九八〇年一〇月四日)

内面の世界で袴田は、万能の力を持つ最高権力者である。時おり両手でピースやOKサインをして「宇宙と交信」し、食べる前には不可思議な言葉を延々と呟く。ひで子が勧めた日記を続けているが、獄中で時間感覚を失った、あるいは別の時間を生きている袴田の日付は数日遅れている。布川事件の元無期囚、桜井昌司が年始の挨拶に訪れると、袴田はまだ正月ではないと主張してなぜか激怒、何やらまくしたて「帰ってくれ!」と繰り返す。

権力に壊された姿は痛ましいが、彼をそのような状態のままにした私、私たちに(もちろん、日本で生まれ育った永住者でありながら、国政どころか地方政治への意志表明すら許されない金の責任は「国民様」とはまったく違うが)、そこから目を逸らす資格はない。釈放後、袴田